

武藏名所考

冬

L2903

→

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

武藏名所考卷四

晃嶠陳人編



堀兼井

名所抄に武蔵注に入間郡類字名寄松葉並に載と名
寄に堀兼井に作る歌林載せと

枕草紙に云井と云りこの子の井

八雲御抄に云りかねの井武蔵

丈木集に云りこの子の井武蔵

藤垣草に云堀兼井武蔵入間郡

義經記に云ありこの子の井と云りこの子の井と云り

あつてまゝ申すのなつめからふのたよ〜ふとあつてつれ
の國をわし〜のふとふとふとふと

太平記よ云源氏を絶つて討つて平家入る〜亡めたるは源氏
二度の合戦よ打負つてな地〜と分替と若〜と絶く源氏
絶く寄〜と〜つら連日教度の幾よ馬あつて絶〜つら
一社の馬の思を休め〜久米河に絶と取つて明日と絶
つらたれい云々十日自れお未明ふと若人押あつて時と絶云々
義貞遂よ打負て絶金銀指〜引退〜

又云源氏を絶つて易南に絶〜と絶と願わぬ野血よ
絶つて絶つて絶つて絶つて人馬汗を流〜と絶つて絶つて血となる
宗久徳日記よ云今ふと〜と絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて

なりぬ〜と〜思ひの外に絶け人乃絶つて道の道と絶つて絶つて
一人よ絶つて絶つて絶つて絶つて一人二人有〜と絶つて絶つて
〜と絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて
〜は絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて

圓國雜記よ云絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて
戸〜と〜やせの里ちや〜と絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて

多摩川の里
乃下よ載す

名取方角抄よ云絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて
日光紀行よ云山の端と〜ぬむ〜と絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて
續無名抄よ云武務國やりの絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて
江府よつら〜の絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて
よ絶つて安府府の絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて絶つて

省れりけり安座府天徳寺に未申のかこ何のれ後
園に在るといふぬ

志料よ云堀の井八入間郡川越に在るゆゑ今俗
説江戸砂子にも牛込邊坂の志に在るといひぬそれ
より先此書ハかゝの如く志をせり一瞬軒ハ東郡の人
ゆゑ志ぬもあつたりあるに麻布天徳寺の志に
存す一志へかむ人そそのりある人そや云云天徳寺
あつた麻布とあつた

江戸砂子よ云堀兼井牛込邊坂の婦りと里後よ曰徒
母の後よよりとそその父に井川やうはよけりそよ
て死よのと名と及と也又多摩郡中野の先よもかり

武蔵野四三

かひ乃井といふあり

按よるに今年に堀兼井と云井二所ありひとつハ
牛込の下筑紫氏乃屋敷の脇に在ひつゝ八箇士見
馬場久保氏の屋敷乃ちちよ在

諸國里に後よ云武蔵國入間郡堀金村よ小高き山よ
浅間宮の麓よと云一窟めふふよ堀金井の傍あり方
六尺より石浅窠して井柵と云一穴ハ堀とて若むより
傍よ碑有近き頃川越を此武士乃とこれと遠し也川
越より二里未申の方ハありに堀兼井と稱する不遠
此系浅間堀のよと云也此より又六町南よ方二十間
よりから堀の如く窟め敷不これと云の井ハ法也と云

又乙女新田盛志入間の里にもあり惣して此所を地を
うらと水とゆがく一伝く堀のいふところのい里傳うく是れ
を迷りたる之堀金の名かきこは堀金井とのい堀兼の
字と書しりの中この西伝うくかたなり

按とるに近江比達一とのい八寶永八年戊子此碑
かり其文は此凹形之地所謂堀兼井之蹟也恐久而
遂失其處因以石井欄置坳中削碑而建其傍併以
備後監里俗堀而難得水故云爾以兼通難未知只
從俗耳寶永戊子年三月朔と有秋元但馬守の建
し系と云

武藏野地名考よ云堀兼井入間郡の内より何越

城より三里とあり府中より又三里と堀兼といふ里あり
堀兼と云事此不土地をさう故よ二級にあり下き
一級と下りて井の深さサ尋とありよさるは武藏野
のうちたくと井深なるは十尋なりとて水をほねる
早に急くと水必このくなり堀かこの井ハむのより
して水たゆることあり

再按江戸砂子よ云堀のい井正にあり赤坂清門の
うち岡部家やよきの内西に谷よあるとをりおね
の井と云中たり又近年怪き一書ありと傍何
うといふ傳の附此井と尋ぬ其人知事てんじ
をいあ人を語明白よ志れたるおのむたとのすこと

まこと信しつゝ記すことあり

江戸志よ云堀兼井の説諸書よりわくあり或記よ
いふ河越のうら堀兼井の流と云ふ所ありまら流
同宮の下にあり成るものと云ふ事この俗よせんけん堀兼
と云ふの外二所あるにけ下堀兼より戸なりかひとて
あり

按するに河越のうらといふは誤と河越のうらと
いり戸ハ入首の誤あるべし

武蔵志料よ云堀兼の井も河越の南よて所入間郡と
言井戸ハともかくは満つとく多摩郡ありとの事疑し
むとらくハ今言井土といふこといふハ後人の書入あり

又高井土乃ほつとりよ入間村有れいなるべし

武蔵堀兼井事實よ云土人の口碑よ日本武尊東夷
征伐乃濟時武尊の水之く諸軍渴よ及なれハ武尊
民とく為よ井成堀しむるに牧笛不鳴とく水を得
されハ龍神に余とて流を引しむる今是と不越年川
と云或ハ入間川のうらともいふ亮盛
碑と建たる事ありと載と

按するに今云入年とくは川と稱するは源と宮寺と云
より後ハ南入首村を經とく新河岸川よ入首
ことある小流あり

武蔵志稿よ云入間郡南入谷村ホリカ子ノ井

按するに谷の字ハ首の誤なり南入首村よ七曲あり

井と云ありこれをも堀子の井と今いひ傳ふ
後よあつと

三芳野名所舊跡記に云浅間社入間郡之内堀兼村に
在り社を慶安三年に松平伊豆守に遠立たり川越の
南二里余あり堀兼を堀金と書る非あり

又云堀兼井武蔵野古跡にも名なきに云此井は浅間
の社山の裾に方貳間ほどの凹の地其内の方を間を
のりの石の井あり半八土に埋り則堀兼の井は古
跡に又此を堀兼の井と稱する如多し此南六七丁
程ありて井跡あり又入舟村と云ふも七曲りの井と云
あり江戸四谷ありと云ふ井と云ふありと云ふあり

武蔵野方數百里の廣野に多く人家あり此浅間堀兼乃
井と云實の古跡なるべし

武蔵演路に云堀兼井堀兼村小き山に浅間大権現
宮あり少く宮は堀兼井の蹟あり方六尺ありあり
石伐掌に井ありは堀兼に昔ありあり傍に
基の碑あり云俗に松平伊豆彦川越城の頃建ら
し

此碑宣永戊子建るべしと云ふ
移封の後あり秋元但為建ると云況は

今浅間宮の下に石あり上は堀兼の宮に勤蹟と
と云ふことこの変は是より二三町脇小きありあり
今麓茅のそ茂り堀兼あり其石七曲りと小名と云は
まことその古跡と後代に少きなりありは是より後年

く〜と云ふといふ又浅間の宮も吾のまゝに井首は和歌で
深く水上より入るゑのぬる程凡廿尋と云り之丸を以て組
よと云り此外は村より二三箇所井首とを想して此處土
地言々してあを沼か〜と云つて堀のこゝろといふ里語よ
よと云く其は誤述〜たる堀のの名水るれハ堀金井と
いふと兼の字誤書たりまゝと此正誤〜と云ふと或云堀
金ハ北野といふ地より北二里其二三町脇よ七曲といふ
堀井向り水涸主人の説よ古いつまの流ゆ於野中水長
是と穿よ深くあよあると七盤曲あると云ふと水涸
汲つるあ〜と傳ふ北野といふ地ハ川越城下ハ四里は南の
方と云

按と云う堀のの井を八間郡の名和と云ふ事藤原系は
〜と云ふこれと其地た〜と云ふれとこそ其四町と定るをひあ
〜と云ふ〜也余其地〜と云ふ〜これを探り〜ハ八間郡堀金
村北入る村北入るハ新田南入る村等とある土人七曲
の井戸と稱する古井ハ跡と知り〜き窟のあり不十四
箇所向り〜堀兼の四跡あり〜と云傳ふま〜ハあり
と昔時武藏野の中央〜と云ふ〜と云ふ平の地な
きは井を堀る〜と云ふ〜と云ふ水涸堀の〜今も
ま〜と云ふ〜人の〜か〜ぬ〜より廣くほり
〜と云ふ〜と云ふ〜の〜か〜ら〜と云ふ〜と云ふ
め〜と云ふ〜と云ふ〜七曲の井戸とハ稱せ〜と云ふ今も

その形さうせきなく窟うよのこ深きうその十四箇
家と堀金村と七ヶ所北入芳村と三ヶ所北入芳新田
二ヶ所南入芳村と二ヶ所堀金村の七ヶ所一ヶ所浅間
の社の傍と一ヶ所二ヶ所小名原と一ヶ所道のやうよ
下和云く小名原と下と一ヶ所度孫右衛門といふもの家
の裏と二ヶ所和興八といふもの屋敷と一ヶ所仁右衛門と
いふものいふ所畑の中は二ヶ所あり一ヶ所今畑といふ北
入芳村の二ヶ所一ヶ所小名原橋場といふ所の観音堂のう
しろと二ヶ所 逆きう一此并沢邊のりた文保三年寛正三年の碑をゆり
今観音堂といふ所はけの農者大堀兼の井はさうく
とあり 二ヶ所は小名原のせうといふ所と二ヶ所小名原
といふ所の家の前と一ヶ所河り北入芳新田乃二ヶ所

一ヶ所森を湯といふ所の地と一ヶ所二ヶ所とこの所より
の畑中によりと比兵尾井戸と稱するもの一ヶ所南入
芳村の二ヶ所一ヶ所金剛院といふ所此裏門乃外より
下和云く市を湯といふ所の家の前と一ヶ所あり
土人堀兼村のと除きう入芳の七ヶ所井戸といふもの
甚外と又堀兼村の内小名原と下たふを湯といふもの
家の前とある俗ふかんく井戸と稱する所の此井と六
水とありく七曲の類とあるねと古井と一ヶ所あり
又堀兼村下奥富村青柳村も古井井乃並あれとこれ
らうを水なりといふ人又四ヶ所と堀金村浅間の社乃
傍と一ヶ所ありて家の堀の井ありんと云と此所ハ

新田地うへへ村を塚金と名付けハ遠くぬ世乃
事と土人をいふ村名をかたむく実海と定むるも
此を来たうくや土人のいのかうり紙書くらむりハ今の
浅間の社の名に傳き古井の記あり一人のから入ん
る事と伝をきくいつの頃つこれを埋め土城言くゆり
あけそのよと浅間の神をまつまうり今石の井けを
ほくりしあまとの古跡伝うりあるとあり新ふ
りりしとをまき諸國里人後三芳野田跡記と浅
間より五六七町南と井の記ありと載るはより
いふ山名基事といふ所のゆり之に戸志といふけ下あり
このゆりといふ事すれはら孫吉兼門與八仁宿兼門等の

井のゆり之の事ありこのゆりといふ事すれはら北入芳親着
豊のうへへ海に在る井のゆりすといふけあり地言く
して水を伝かすれといふ方も井をこれ場のゆりあり
宗久藤日記と場のゆりの井ありかといふありし
いふ事と知し今そのゆりといふ事十餘の蹟伝て
これをやとことよむ事といふゆりありと互に事とを言ふ
へけきむりし井は堰といふ事といふ事ありし
逸の井ありしこれほりかといふ事と事と事とを
伝と事とすといふ事と波首の機もむりし山名
と伝といふ事と機をいふ事と事と事とをいふ事
しれ井のゆりし山名を傳伝はら後とひりかといふ

へきふく多々かり今たましく一不之限り棧の古
蹟と傳ふるあり又太平記之堀金に作りしこれハむ
のけ付地よりこの跡を堀のせむるよりの名あつんと
いふ人あり金沢ほりこるより惣りり一名あつは金
堀とやいつ毎に綿織徳積鳥取たしとぬるは和語
ちのこかくの如し一用代先りしと體を後之抄に
唐語之限るありこの古歌にも堀のほりく水あき
心こよめふよそこのの事にはあつさる流と今へし

大伴家持卿 家集

むさくがるほりかねの井汲きてこれ日之暑さあつたえはほり

伊勢 家集

いそかく思ふ心あつほりこの井よりも物を流さすさきほ

同 秋枕名寄

武彦の堀兼乃井の底と流と思ふ心代何よりあつと井

紀貫之 家集

とあつとねのひこ井やれ武彦野のほりかねの井はけりし

源俊頼朝臣 家集

あきかるとねの人はここのほりのせりかねの井はけりし

西行法師 家集

ほりしは人もあつと人のつら堀兼乃井乃底はこころ

藤原俊成卿 千載集

武彦のほりこのねの井も有のさうれく水はちのきこよけ

慈鎮和尚拾玉集

今ハわき浅きころを忘れ水いりなり乃井流くありん

後之我太政大臣

源通光公
秋枕名寄

ほりのわきあはれきくむしつ井の流るる波のころ草

冷泉太政大臣

藤原公相云
史本集

むきし井也堀兼乃井の流くのとて深きと増るよもの夏草

堯憲法師 北園紀行

井とて深く壁のあまたなりむききたのほりむしつ井の流るる波と

道興准后 田園雜記

井をかふるよ跡ふむきし井なりむねの井に水をたれれ也

同

昔たれむしつくの名流るる水也むしつとほりかこのおそ

逝水

松葉に載せ名寄に未勘の部よ裁と名取抄類字歌林裁せり
史本集よ云むけの武彦

諸國里人後よ云逝水武彦野よ在まきとれ水よあはれ武
彦世の湊置の事をもつらくせきとくうらかある甚の定よ
地名きてこまこよりいんれとまれき事流るる水乃流
るめくよいゆかこの水よありこれハそのけりて又向
よ流るるめくれ流ありいしむしよてもその水は定めとれ
りて先之れと逝水くやうなるあよかく名付てり甚より

其のけく有り秋をむかす

武蔵野地名考よ云按よむさしはよ迹ありと云地名あり
堀桑村のありりよ年とて川と云細き流あり其分れ
敷をきつめとくあのがるきさる川也奇異のり之移とも是
を迹水といふも便なりや或人の白露雨の頃武蔵野
をゆく野原のほろある所を水溝と通ひのりてこれを
よけく野原をよけといふともある水あるれと草根をれ
沿のりて此時往及の人定るるぬ道哉とていふも
さゆといふありたかきと吟ひわさむさしへの人れこれ
ることよて年の八九月霖よきとてハ必あるるあり人
の曰これゆん迹ありと云へきれ古ありともむさし野の事と

これよゆく多れ迹かきてもとあれとての名と事と相
符とるもや

武蔵遊草よ云迹ありのりハ古老傳人いひて其の頃小
川新田といふ所の一本榎といふありりより野白天王社の
色あるハ武蔵野地蔵といふ色まきありしよとあれとを
今も民家こもてを伝まきりて武蔵野の傳ありゆき
迹あり絶たり

按とるに田祝或を陽炎とて或を行潦といふと
と毛源俊頼頼臣の迹かきても世伝といふはつか
りる事と於て切なりとさるる如く物ありと本則多
摩川のなりり土地墳起せる所とては水地中より

穀里よりと涌出るもの有豊高郡石神井村三寶寺
池多摩郡井草村善福寺池牟礼村井沼池等とこれ
多摩川の伏流なるんと言説あり義濃國醒井の亦
毛若老の湧れ伏流之といひ西土齊州酌突泉之水
阿達とかうやうれきありなりと守へるに逃かす所と
いふ歌と於てハ伏流と守ることを獲るゝ免余此説を
得て後三芳野名所舊跡記とよみしに三説と得
たりてハ武彦時之逃る水と非と曠たる系龍に
水如こより見れハ其れ末の水の流るゝ如くこゝに
其れよりと見れハ水あり又其向れたるの如くこれハ
り程是之逃りやうある故と逃ると名と呼ひし也

二は水野村と云雨之郷ケスミ深水野忠助と云の居る
處に山川有藪の中は流き入り地中と志と逃る流
の末あり是は逃水といふ三は宮寺郷と云雨之
年と云川と云有畑の方より涌出る川に成り夏
の大雨と云出水の前ハ怪我人孫あり毎年大晦日
至りて水流る事なりと第二説といふ多野村ハ入
間郡山田庄川越領とて堀金村と隣る余は海
忠助の家といひたり見るとかの説のこき小川あり深
これハ宮寺郷のなりよりせりなりと云事二里
許之今も藪ハなく川の本堀切とありはれりゆその
又六間より上鏈の事と折まはる事とハ潺湲言

流るるまじと堀切の石とあるまじと水とありとまじの流を
まじとまじの源紙の石とまじと三尺餘とありとまじと
とありとまじの石と類せりまじとまじとまじの石ハ推量
ありとまじ此の石村の石の石現とありと遊水ハまじ
こまじとまじへまじとまじの石村ハまじと新田地とまじ人
家もまじのりまじと石忠助の先祖あるまじのけまじ開
きまじとまじ

源後頼朝臣家集

東路ふありとまじの石ありまじの石ありまじの石あり

入間里

名寄松葉の載と名寄に入間郡寄里也有郡寄可尋之
と云名不抄類字歌林載せと
續日本紀の云稱徳天皇神護景雲二年秋七月壬午武蔵
國入間郡人正六位上勲五等物部直廣成等六人賜姓入
間宿禰

拾芥抄姓尸錄部宿禰の下に入間あり

延喜式の云武蔵國入間

和名抄の云武蔵國入間 伊留未

吾妻鏡の云建久四年三月於武蔵國入間野有追鳥狩

名不方角抄の云入間里小川有世俗に入間の宿といふ郡
の名あり 方角抄の下のまじの
里不田の里と稱せり

南向茶話云川越の城内にも業平の社を奉りてといふ
是も入間の里に居住の故あり

武野志料云入間里に於てあり入間郡をむらうとていふ
入間の郷に和号云々云々云々此の類ひは多く

按と云ふ今入間郡に入間川村あり河越の西南二里
餘に在土人の説とむらう入間里といひ中頃入間村
と傳ふ村中に天神社ありむらう在る業平朝臣は
社の西とて号とよまれむらう業平天社と稱はと
あん志云々云々此の社に菅仲云々云々業平朝臣の靈
をいふは是れ也

又齋藤敬天いふ入間川を近世むらう川と云ふ名を

得る地ありといふ人の入間里と別あり河越より
南とあり入間村と南北二村とわかれ大村あり
間と号と号體相似く誤書し奉るるやこれを
まじうく古の入間里なる人々余考るる俗圖の文書
と片假名りて送り紙施の事多く入字の下にリ
ルを添書せし書能より後に入間とありけん
おのり又射魔と書るるといふと奇談好くあり
字を楷せし書ふれは衆るるといふ況るの極令の
類とてこれ唐語とて古に邦語と述ぶ

藤原俊成郷藤原

さりとてやたのむれ居候とていふゆに乃里にきよを入ぬる

雲わくれむのの末を交るのいふまの里やゆふた乃と

附 入間河

北條九代記に云 堀越次親家より藤田光澄武蔵國
入間河より河へゆくも清水冠者氏討

又云相模入道櫻田治部少輔貞國より六万餘騎とて
入間河へ向はる

太平記に云武務國小寺屋原より打原給ふ云云軍八咽日
と約談して入間河に陣取るとる藤倉勢も三里引退と
久米河に陣をとる取らりもふ兩陣相なる其間とて渡せ六

三十餘町よたるとりけり

神明鏡に云文和三年七月廿八日基氏畠山國清武州入
間川津發向

北國紀行に云入間乃舟渡り

回國雜記に云これより入間川はありと云云此河ははきとて
さゆくの流あり水逆よりあるは流るといふ一義も伝りま
里人の家乃内より流る侍るといふ水のあつる方角也内流
こころは行方流かま下と伝るあかて一家これに誠はせ
あそ伝と物とてすかすは云々云々もこのさるなるあそ
と毛也其形なる風情とて伝り

武蔵志料に云此河の上は今川越より小川へ流る

少子流まで幸さく川といふ有すあつらはあつたまき多
摩郡と入間郡との界川のやううと後谷戸といふ村有
是すこのそのよりよく今り村も多摩郡に在

武蔵野地名考よ云入間川これ又野中にあり西六つちぬ
根よりあつたぬく荒川は落るよと云ふ又とて川とあはれ
周流とてこと武拾四五里あり今も又入間河と云里あり十
里あり江戸は到古跡あり義貞朝臣この河岸に陣し
ゆふとを旧跡あり足利基氏朝臣も此所に住し東國氏
流しゆふと云傳へたりとてさういふも此のよりあり

按とるよ入間川を秋父子此指沢の南の谷より出る業
郡落合村とて多摩郡北小本宮村よりあつた川といふ
一流と會し言業入間の間をあられ入間郡と入り押邊
川と令し比企入間二郡の間流なれ荒川と入る流
いふあり北國紀行角田川を志るせる所と利根入間の
おらあつるとあるは荒川と入間川とせらるるまことあや
まりたるとあるあつた

田能武澤

松葉小載と名所抄類字名寄歌林載せず

八雲所抄よ云多のむの沢強河とのむのめりといふるは傳勢物
語よ武澤なり

按とるに田能武澤はよといふる入間川村天神社ありといふ

埜の川と流る下流の示すれらむの川のありと今も土人のいひ傳ふ

攝政太政大臣 藤原良經公
新古今集

意る多し多のむれは成る房もいふとあり風の秋はゆきれ

藤原有家卿 史本集

秋の厚風よきむむと秋路より誰とたのむ乃はたゆらん

田能武里

松葉ふ載と名所抄類字名寄歌林載せと

史本集よ云たのむの里武翁 藤原

按とらと田能武里と上たりる入田里此別條ありと

土人らいりされと史本松葉たきむむとくこれと
ことこのり

源俊平綱臣 史本集

今あんと秋とたのむの里今まのむありやと川原乃登

三芳野

名所抄大和武藏二所と及又所吉野里大和一説武翁と

載と類字名寄松葉並ふ載と歌林載せ及

八雲所抄よ云見吉野の里武藏

史本集よ云とくむ里大和又武翁

伴勢物語よ云とくむ里とむむと此國まてまむありと

亦云云任とてりかんいりまの郡みよりけり里なりける
真名存勢物語と云武藏國入間郡三芳野郷有流
北條五代記と云其のち河越の城と再無一氏網在城
のぬ此城を朔定公先祖の家老太田道基といふもの
初めく城と云と是と聞くと入間郡三吉野の里と云や在又
中将のありやと云ひく三吉野の田面の存と云ははそり
日光紀行と云河越城中も名を抄みよけり里ありきり
紫一本と云三吉野足立郡の内上吉野中吉野下吉野といふ
阿り是と三吉野といふ古奇みよけり田面の存もひこ
ふるよ君のかつとよと云ふる此奇存勢物語の古書
入間郡三吉野の里とあり

武藏志料と云今紫に上中下有ありと三吉野といふ
ころ何と云たと云三越路といふや三越路中越後
の三越を合せと云ころと云思ふ六傳事と云ハ其
の意と云く大和の吉野と云ころと云三吉野と云
三吉野といふ是も三山と云れり六阿といふその外
三谷と云の敷ひと云かきといふた同く貴族の領と
されハ三吉野といふと云知る
武藏志料地名考と云三吉野の里入間郡のちりなりと云六河
越と總名と云そのもの法と云此なりありと云と云今同く
武藏志料と云或人云三吉野の里今の河越城の西と云ハ
今の城よりハ一里なりと云當るといふり土民傳人云毎年八月

十三日一必と厚の写と同とを武蔵の厚と此所集といふ
三芳野名不齋跡記といふ川越城入間郡山田庄三芳野乃
里と在

武蔵演路といふ三吉聖天神靈社川越城内落産三吉
聖とある大まに江戸町の多岐いふと上中下有と一在亦
業平の満居の和といふハい

按とあるにいふ一三よりの軍といひハ今も三吉野郷と
いふうちぬえ一武蔵國村付と三吉野郷二十村川越郡
河原上下新河原砂村南田島牛子駒林橋瀬苗圃
福園鶴馬寺尾友倉宗園計ヶ谷水子今福青柳北
入芳かり川越町と今山田庄に屬して郷名ありこれ

もむうハ三吉野郷とあり一紙後小郷名とあり一あり
と今考が

在原業平朝臣 續後拾遺集

わのむとよるとなくあるみよりのむ乃厚紙といふのむとねん

ナニ人志ら後 伊勢物語

みよ一聖れたのむの厚もむとあるに君のかとよとよるとあり

後京極攝政 藤原良経公 月清集

とよ一聖の里ハあれ一秋の聖にたま紙といふ乃と門厚紙

藤原有家卿 千五百番秋合

みよ一聖のたのむとよとあるにたま紙といふ秋のけとむりよとあり

藤原雅経卿

みづきやたのきし原の藤すかり花よ名残乃とほれ曙
定範法印 丈木集

かきまひのさきしりの里かまへきのむれ原の松志のふらん
藤原知家郷 家集

りまいたのむの原のむれ原わよれつこよみよりしれのと
源具親朝臣 新續古今集

をりしと阿れたのむれ原のわれえ花散ころれこよりのさき
藤原忠良郷 千五百番歌合

えよりけ月をたのむれ原合やたさくはもよるとかこらん
藤原為守郷 千首

わの方ふよると思ひてさきしりの田西乃月よかふるゆりのね

慶運法印 新續古今集

たのむよりしとさきしりしれたのむの原乃むれわの程を

堯惠法師 北國紀行

春を今と阿れよとさきしりしれや霞む山をたみよりしれの里

附河越

道興准后 田西雜記

かきり阿れとさきしりしれ武蔵野の境を志る河越乃里

浅葉野

名寄と載と又信濃とあり松葉歌林載せり名寄抄類字に浅
羽野信濃又名寄と浅葉野とと載とといと武蔵野

武彦野原の例として別にこれとある

萬葉集の云浅葉野

拾穂抄の浅葉野信濃或は武彦と代匠記の浅葉野
志志のよあるより第十二の阿まを野よたつは小
波と讀りといひ

和名抄の云入間郡麻羽安佐波

史本集の云あまの武藏

吾妻鏡の云浅羽庄司治承五年

又云浅羽五郎行長文治五年

又云浅羽小三郎浅羽三郎文治六年

又云浅羽庄司三郎建久六年

又云浅羽次郎兵衛尉建長二年

又云浅羽左衛門尉次郎建長三年

武藏七堂系圖の云兒玉黨浅羽小大夫行業

武藏志料の云浅羽野或書の云信濃又ハ武彦と有武彦
の阿ま事未考

武藏國村付の云入間郡浅羽庄川越領下浅羽村

又云入間郡浅間本郷上浅羽村

又云浅羽庄入西領北浅羽村

按とるに浅葉麻羽浅羽文字異れとも例の音外りた
信濃の阿まのものと相混して無かろしあれも今も
入間郡上浅羽村の田の中といふ人何れ此城跡とて

稲荷の小社あり此邊淺羽郡といひ〜と土人の語り和
名抄信濃國郡名の下に淺羽あり〜と本郡と淺羽と
載されハ美事なよめふちこの淺茅野と云ふ人た

柿本人麻呂卿 萬葉集

あさと世に立こわらふけぬがたきゆゑよふわのこひいん
よき人〜ら

これ多の淺茅野野らにかるまのほのあひまもこれやますれ

源俊賴朝臣 歌枕名寄

君はこそあさとち原小社つゝ志のり〜もあもふのく思

式子内親王家集

わの神のり〜もひめやこれ多のあさとれ野らよかた夕霧

藤原家隆卿 續後撰集

これ多の淺茅野野らのあはよれ〜と神と人れとめそ

同 秋枕名寄

あさとち人の心あさと野ら〜とわこまけ福さ〜とちめや

藤原公純光卿 夫木集

春の淺茅野の〜とよつのもふ雪も消や〜及人のゆるさあ〜と

源家長朝臣

紅乃淺茅野の〜とれ葉も本をま〜と深とそぬ初 晴雨のり

常盤井入道太政大臣 藤原実成公 續後拾遺集

〜とまゐるれ何〜とれ野らよおく霧の色よいつ〜とわらぬ神のれ

後之我太政大臣 源通光公 秋枕名寄

齋雨もぬりぬりけり河をせりよの川をけりよの川をけり

藤原為家郷 史本集

河をせりよの川をけりよの川をけりよの川をけり

同

あさき野のあけけりまけおそくがれてあけけりよの川を

藤原為藤郷 後撰撰集

夕ふれいけりよの川をけりよの川をけりよの川をけり

藤原経道郷 史本集

まきのの川をけりよの川をけりよの川をけりよの川をけり

堯惠法師 山園紀行

まきのの川をけりよの川をけりよの川をけりよの川をけり

大屋原

名寄松葉よ哉と名不抄類字教林載をす

萬葉集よ云於保屋我波良

武彦志料よ云萬葉に伊利麻治能於保屋我波良と云

とれとれりら入間郡の河川の河をけり文字詳るる

そこの大野のあけけりよの川をけりよの川をけり

系たよのあけけりよの川をけりよの川をけり

ありそのあけけりよの川をけりよの川をけり

侍る日中の勅聽聞のあけけりよの川をけり

あそよのあけけりよの川をけりよの川をけり

やとらんと云此あるべし

武彦濱路よ云大谷我原入間郡大家郷今大在家村有
大谷郷といふ一或豊島郡板橋郷

又云山條分根根板橋内大谷郷といふ由大谷郷系八板橋集鴨
の間今庚申郷のこころ代り又大井郷といふ

北川一善云大谷郷系八足立郡之足立郡の内南村と云南の
限より東八領家村西八大谷本郷村上尾と桶川へわたりと大
谷領と云是大谷郷系

橋より北系系集之於保登我波良とよめるハ大谷系
よりして河系の義より河にあり今入間郡之大谷村あり
村より十條町山之わりと系河り地河の系といひ傳ふ俗

いふ事地河やの系と云入間江頃までとあるはかりに
今も松平と多く極く東へせまりこれと於十條町
河と云これやわたりて赤城日光筑波の徳山と云て
極て勝景の地と云れりちと云河の沼といひて十間と武間
と云りの池又大亀の沼とてあふりり此池あり中島と
系財天の社有り蓴菜多く鯉とと産とれと毎天の
池とれとととと人これ取捕らば系系といふおつと
よとととと此池より生ける藺かきとと大谷村八方二十町
と云り何る大村ととと堀江庄のうちととと島郡足立郡
ととと大谷系ありといふ説ありと系系にまはり
伊利麻治能於保登我原と云る其説の非ある事

論さる紙待次

よき人より萬葉集

唯明法師文集

右入間郡

碕玉津

名取抄名寄松葉並に載と名取抄に碕玉津と作る
浪玉津玉津とあり類字歌林載せし
萬葉集に佐吉多萬又前玉

拾穂抄に碕玉津武藏之

八雲抄に云と云と云の付國多と

文木集に云と云と云の付武藏

藤原集に云碕玉津武藏碕玉津

紫一本に云と云の碕古歌あり碕玉の郡八岩村の今城ある
所と是立郡乃うち大門といふ所より岩村へは道み不自沼と
いづく七里續と云といふ大池あり此池に付と碕玉の碕と云
きの池多と云と有る也又利根川より其その名有る碕玉
の郡より海を遠く

武藏野地名考に云碕玉は碕玉郡乃内たりを云未詳
萬葉集にみえたり

武蔵志料に云、埼玉郡の津名、利根川なるを、
北川一善云、埼玉郡に埼玉村あり、村の南に三町あり、
不伐川にけくさの津といふ

按、此の津、玉津、此の津の部、この津、
の亦ある、利根川より流る、
き、此池の付く、玉津の池有、
その西に津の名ある、
少津、池、玉津、
名也、といふ、
津をきく、
遠くといふ、

海津あり、
通、
久、
よ、

きたる、

小崎池

名、
とあり、
萬葉集、

拾穂抄に云見安に云武藏國名不之埼玉郡に在代匠
記に云た玉の埼玉郡に云武藏廿四郡の内あり

八雲傳抄に云と云たの池武藏

文木集に云小崎の池武藏

藤垣草に云小崎沼武藏

武藏地名考に云小崎池荏原郡に屬し其不詳

武藏志料に云小崎池埼玉郡於尾崎村忍城の裏に在阿

部豊後守碑石に云と云

按に云忍城の邊に尾崎村と云あり一碑石に云と云

一八埼玉村ありと云に武藏小崎沼右所名稱武藏小

崎沼即是也所者證以萬葉和歌集矣自寛平五年癸

丑歲至今為八百六十九年蓋可知其古矣此地紛紜

茲蔚中而既為隱其所夫豈可不惜邪於是勒其地名

於石以為不絕不朽云 此下は系集の歌二首を
のむ今も此に云と云 寶曆三年

癸酉歲九月望武忍城主阿部正因建臣文國平岩知雄

書に云

武藏郡村記に云埼玉郡尾崎村

埼玉郡誌に云小崎沼忍の城より東北にそ沼のなりは埼玉

玉村小計村あり

按に云忍城の東北に云るを誤り城よりを東北に

阿部に云

又云小崎沼を今沼縁新田と成中程大なる沼あり菰蓮

菖杜若多く新鯉鰻鯉任りされとも海より及冬は多
多くとてく豊敷の逢ふ碑も野田の末清も浦田の縁
松中と有く寂くたる所あり

梅と多に諸書と崎玉村とある池代りく山崎の池と
されと本郡釣上村の面山と尾が崎村といふあり
この郡の池沼多き地を八毛くもはけりうとむじ
池ありく山崎の池と稱せしとやさきまの山崎の池と
いふ代りく崎玉村の池をたたらこれいへるる説也
よき人しらす集

藤原為尹郷千首

され此をさきといけし鴨そとぬきおのりたを我とて物也

山崎の尾とたの池は秋の月とそや後代のけくはむく年

平時親 夫木集

水鳥のやとたの池乃水鳥とてうた新うりす後かちむ

右崎玉郡

岡邊原

名寄松葉と載と名不抄類字歌林載せと

夫木集よとと人のとく武彦

吾妻鏡よと岳邊六野太忠澄 文治五年

又云岳部平六岳部右馬允岡部六野太岡部小三郎 文治六年

又云岡部右馬允 建久六年

又云岡邊左衛門四郎 文曆二年

圓國雜記云岡部の系といふ所をわたりて孫とといひ
ののぬれ曰はるる近代関東の合戦に数万の軍兵討死
の在りし人馬の骨骸をて塚に集りて今も古墳あり
まじり

名取方角抄云岡部原 向岡の下

木曾路記云岡部の系名取之古教省岡部六孫右忠澄
舊宅あり駿河の岡部云六孫右宅有りといふ古虚記之
武蔵郡村記云榛澤郡岡部村

按云云岡邊岡部字異なれと同處より圓國雜記
以下の記皆從ふ

曾孫好忠 家集

むきくはさとの系の新藤も花さく時よりありたりと
道真准后 圓國雜記

るたをよよとの系の子孫不秋乃志すこれ松風を始
右榛澤郡

武蔵嶺

名寄松葉に載と名取類字歌林載す

藤原草云武蔵小嶺武蔵

郊の法と云ちぬ山との西より年久しくはるかか
はとありてぬるありたりて村乃人むきを借ると

からけい言ともやほれぬ所いひける人ともさうの志しむ
木曾路記に云秩父山を武蔵新峯と云ふ山也江戸の權
ちもよりみゆる江戸より峠れ方より此
名所方角抄に云秩父山の嶽を西のくくあり山守り云
たりと云名所あり武蔵根といふも此秩父山とみえに
富士とみえたり

國名風土記に云武蔵國當國秩父嵩其勢鎧武者怒
立躰也依之此國之人心武也日本武尊東夷追討之為
下給時彼嵩詣御覽吾朝人心武事此嵩故也仍吾凶徒
從大將軍然為御祈禱所持之給鳥兵具彼妙嶮大井御
嵩納埋置鳥彼武具岩藏籠故号曰武蔵又武具指置仰

有鳥故云介

江戸名取話に云此國の中に秩父嵩とてきた山あり
その山のさ海をくはは瀆武者のたよ怒りてきてあり如
され八人皇十二代景行天皇此所宇に日本武尊を東夷と
めんこの為よけ國よりのみひの寄れんくき坂をひ此山
のいさひより此國の人の心は猛きことと餘國は捕れ
たるもことありありと志ろくめり今大將軍とて
東夷の王金よそむく代責をてん人う為よわたり頼つく
此嵩の神我軍を守りてとて自ら所持の武具と考
のよる岩花よこめく山神と考りあり
武蔵志料に云秩父峯武甲山武蔵嶺古くちよねと

いふ所今武甲山と相傳ふ日本武尊北東美と討平
たすひて甲斐國の山よとあるひより武甲山といふと
いふこと攝津國の武庫山の事は同一とれとことと
中々年古也未とこといふ事古人のかゝるありて別
きとく字の音乃まいたいことと心えぬことには是
考も有る事と

武藏演路と云むと根多磨郡

按とらに武彦岩と稱するもの程とて一野の如く
これとてかまひりしるるありとされも方角按と秩
父山とせる程あまを替これと後と

よと人しとら及 系系集

むらぬのよとぬとて一志の春のあまをいふと

右秩父郡

蝦手山

名寄松葉と載と名寄と云ふ字未詳名不極類字歌林
載せ及

藤塩草と云蝦手山むら

按とら小蝦手山其正詳なと

よと人志とら 歌枕名寄

名不とて好やまといふとまたこれに類のあまをいふと

海比

名寄松葉に載と名不執類字教林載す

萬葉集よと宇奈比

仙覺抄よあつそひくそ其の岸也岸と春夏秋冬
かろよ夏のをといひ其をむくとみてはかあそひつ
けりそれと麻の扱ひととらうとらふなかり岸取
あかりとのらうと皮ととらうすはら取ひくといふらう又麻
をら根取らうひくなり古今にもはらうあされとら
ちあ華とよあつ岸圖をこころいひはひのりなり又
いふれ岸とよとそよあつ心あつとらうかのみかこは
うへおあき形る儀あつ女の俊ありやあ老女うらと

とよいをうかそといふたあつ一詞に岸取ひきつるは老女

のこのみよ仙とれとあつそひくうあつとかにれおれはすれと

よそとあつこのうあつとらうは上總國よらりとこのけり上

總國よいそと海ウチカタカナカミ北海南といふらるる海上の都あり

と中千岸陰の鹿あつ崎よあつとらうあつとらうとら

ありたれとらう海のやとらう上總の國あり今乃岸よ

よめあつたつとらうあつとらう又類林らうあつとら

の名取とらう海も取らうあつとらう留とれは海邊の處

女壯士とあつとらう海とらうあつとらうかつこの男とらぬ

とらうとらう海のあつ男取らうとらう男とよあつとら女のお名

をとらうとれいといふとれとらとせよとらとら海邊と

惣よかりとよめりととて

加藤千蔭云契沖うかひハきく海色とて六世寄武

箱と定之きなうぬる海方いといふ地名あるといふ

さうらひを

藤塩草と云うかひ武蔵

按と云ん海比其和洋あり

よき人〜ら次 菊葉集

が月をひくうねいをさ〜ととれい〜ととよあり〜

原田里

名寄松葉に載と名不極類字秋林載と

名不方角抄と云原田の里 入るの里の
に附す

按と云と京田の里丈本集にその西紙脱と方角抄と

入間の里のり〜附〜とれと愚図ととの系紙向圖と附

たるよ例せを必〜とおら〜き地〜とせり〜にゆ〜

郡来勘のり〜六入きぬ

源伸正 丈本集

あひ〜の〜た乃里よなり〜の氷ひきつ〜

猪名川

松葉に載と名不極類字楳津とあり類字名寄載と

萬葉集と云猪名川

代通記よま猪名川とよめる八津の由よ伝ふる人あり
ありあるあり

八雲所抄よま井太河 撰津

藻漁草よまいふ川武州

按よまよ猪名川藻漁草よま撰りて收むといふも
其の詳あり

よま人しらすに 藻草集

かくのよま有るよ抄哉舟ふ川の字を添めてわの思ふける

大我井杜

松葉よ載と名よ抄類字教林載せ

按よまに大我井杜其の詳あり

藤原光俊朝臣 史本集

紅葉よらる大のの杜乃夕とて又たの歌山の端あり

詞書よ此界を武後野成るけるよまよとてやよは
見え及して抄ののの書とありのりしうりこひつふ
おまよ見えけるありよまあり

阿賀須沼

松葉に載と名抄類字名寄教林載せ

八雲所抄よま阿のよの沼世本よあり
うに作る

藻漁草よま阿のよの沼武州

按とらに播磨郡と河野郡村あり又高峯郡と河野
村ありこれに沿河りむのへぬるき沿まあり此
あり今故つゝ一嘆る頃を佳系ととり名乃
おちるれは志をく考ことあ人のこ

慈鎮和尚拾五集

年と経く引人絶及このや河の沿よ生は河や免を

古江浦

名不抄類字松葉よ未勘國とと名寄秋林哉せと
交本集よ云ぬるえのうら武彦
藤塩草よ云古江浦未勘

武蔵志料よ云或云当園又云哉中梅とらよ古江村哉
中にあり系系十七蓋鴨のよと古江と云名寄る名
あり何れ新拾遺集五月雨の古江の村いたこの浦をよ
と名をとり又拾遺集よ古江の名とよと云哉中
当園よあり

按とらに古江浦交本集と拾りて收むといと其
所詳あり

遍昭僧正 風雅集

系代乃よ子張かして勢の位古江のうらと松よ本言の哉

よと人よとら以交本集

何れよのふるえの浦よありはるふありとやん人旅の哉

岩瀬渡

名不抄類字歌林並に載せしと名寄松葉に能登と載す
武苑志料と云或書と云武苑かり未詳

又云今樓と云一盤岩瀬渡森野川と云に大和國高市郡也
いとせ川の古歌よか〜後頼朝も有日本紀景行紀十
八年筑紫國巡狩の時是時於石瀬川人衆聚集と有
筑前に於武苑と云抄及といふ〜

樓と云と岩瀬渡志料或書紙引と云と授りて收む
といふともその不詳あり候

よと人〜ら及 丈本集

阿まそまに雪落つらる舟と云と渡りかたをいふとせと云り

同

風を〜と云と岩瀬の渡と云の舟待りと云と云りな我

宮崎山

名不抄類字名寄松葉歌林並に載せす

丈本集と云と云と云と山武苑

樓と云と宮崎山丈本集と授りて收むといふと云其
不詳あり候

中勢郷親王 丈本集

池ありはと云りしと云と云と山風と云と云と雪と云り候

加茂重敏

舟とむら岩せのこころはるめてまはらぬ山吹出れ月へのけ

藤原基廣

五月雨をいそせの渡浪こゝろをさきしよよ雲をかき家

霞崎

名所抄類字名寄松葉歌林並に載せしと

丈木集よ云ふ千々の崎武彦

梅子らにそぬ崎丈木集と授りて収むといふもそ和譯をい

よとくへらぬ丈木集

けるかともあふ橋と思ふ式海の花ゆやま海のうらみ

以知伊津

名所抄類字名寄松葉歌林並に載せしと

丈木集よ云ふいらの一作襟井津武彦

梅とらにいらは丈木集と授りて収むといふも其
和譯をいふ

讀人志らぬ 名寄集

さうあはゆらせむいいらはのむうらうらんきりよあむは

氷川

名寄松葉に載しと名所抄類字歌林載せしと

史本集よまこりりの八武彦又安房備前

按よるよ今備前よまほり河といふや一國山の城
ちよるる川大川とも新白川ともいふゆとを皷
川といひ〜とを皷と氷と列をよれはこりりかを皷
茶とちるせ〜もや

藤原よまこりり氷川武州

武州遊草よま入間郡氷川村よ出る室に流あり河
系と古奇よま極き〜西より則て氷川の上流こりり
按よるよこりり川甚し詳なく及是是郡大宮に氷川
神社ありとむつ〜といふ神号ありと出雲國氷川
よりゆ〜まこりり將集大社の神をうつ〜まほり〜

よりなれはけ地の川名よまあれたる人〜されと風土
記よ皷川郷皷川系と載されはその〜とよれた神名
ふより〜地をもかく呼ひ〜とよゆとを皷と氷と訓
お通よれは延喜式風土記等よま氷川神社と載よ
まこりり川よ呼はさるは備前よま今國山の城下
をなると俗よ大川とも新白川とも呼よけ川ゆとを
皷川といひ〜とこりり川よまとよとよその國の人
よりかれとを皷ゆ〜かうの今よれは皷より〜と氷と
轉〜つあこりりよまあやまほりならん志れとも史本
集よ下れこりり川とありは中河〜よりよか〜ら
はけよ氷川といひ〜もあらよま志れゆ〜とよ〜もあら

ついで今大宮の氷川神社のなりと云ふに云ふ川もあ
けまなりと云ふの事あり見沼といふ池のなれ
る風土記に載るる敷川系と云ふも阿久人此見沼六
り六三里といふ事大池あり其保の頭高田與清
の祖高田友清といひ一人その任ありと新田上
記にきくことと石氏の遊多に入間郡氷川村の流
之といふ事延喜式に載る中氷川神社ある地
まはそ流接かきとありとありと云ふ郡未勘の事
冬これとあらせむ云ふに氷川うへかきと見えわきうつ

祐子内親王家紀伊本集

源式部

氷川氷底のくらしくありと云ふ事

讀人一と云

うらと云ふ氷と結と云ふり河志と云ふ事

同

字と云ふ月の事と云ふ事

曝井

名寄松葉の紀伊と云名不抄類字歌林載せと

系葉集よ云那賀郡曝井歌一首

拾穂抄よ那賀六紀伊の郡の名と或説よ武彦の那珂
郡といふとみ代哥枕八雲御抄等曝井紀伊と云又

代通記に此曝井を八雲所抄に紀伊と注せし勢
強り凡たこの郡といふを國とよ同名抄に紀伊
阿波伊豆石見讃岐不抄のく那賀郡ありその中に
紀伊と賀の字濁音によむべきよし和名抄に注せ
らる彼等のもの八南鷄の二字此くち傳り今の奇
名中にむらるとよむこれ八紀別的那賀とあるぬあや
たしく徳國ともふ中部の心多る紙紀伊と賀とよむ
形すりく濁音よとよむべきなる例よかたるれ又抄に
那賀といふをとも長郡といふをよむけこれ八濁音
とよむせしれなる後知かしく武蔵常陸讃岐筑前
日向よ抄のく那賀郡あり那賀と那珂とわれとも

心をいりまも中の字なるくしとるれを古の奇に武蔵
小埜沼と懸しとるをけと決の二音もむさしとる
へさるやかきやうも後よとさしとれるやうなれや
かきとぬ事抄ほしりんやむのれ奇なるを也

常陸國風土記に云那賀郡自郡東北挾粟河而置驛
家當其以南泉出坂中多流尤清謂之曝井縁泉所居
村落婦女夏月會集浣布曝乾

八雲所抄に云さしり井紀伊

武蔵志料に云さしり云此奇の上武蔵小埜沼と注る
奇何れも此奇も又武蔵の西なる事知る人し尤け奇作
者不知なり曝井と地名なり井の名は八河とさる俗説

は新井と云々も六月井成後三紙を有八辭るなり
按とらふ曝井常陸風土記八雲降抄以下と云れ
断して本州の名所とありて是と云々も拾穂抄及志料
の説より世人感ハ本州と云々此と云々ハあはれ
志と云々く是末に附くその非と云々此と云々

よみ人〜ら及 弟集

みはくらの中よ向ふ曝井此後三紙を有八辭るなり

右郡未勘

前頭の頭は殿を漢乃日本此書の數々
あはれ卷々昭々なり見あまらぬは
師力に録りまつるに世に世に
めては考へてあまらぬは
武藏名所考と名號するはこの國
いと廣らふ大さかれは名所と
定ふ志る人あはれ都人の傳の
すてあまらぬは書を作れり

あれと角田の河舟浮るさかきとあられハ
待乳山北真果とは志れうらむと百年の
後さうりか須田北渡りの廢れたらんと
雲の関のせれあへん堀蕙の井の深く患いて
淺葉北小野の淺うらぬ山田のをやまぬ忠
誠心ハ二股川の二股たのこころを狭山の
池れちやけろ考へおと四巻とながかみい
りることは玉河北玉と老とあましく田圃の

思ひうき魚人はむむ人北崎玉の津北
幸いさやいと海からうを御倉よ
ぬみ飛米にむむとれ本意あたらし
せらねれい乞奉會様末ふる中うとあた
人うあたうあふなむをれさふふ魚と
言乃葉とあふさねとせめてさかきの
思ふあをたよとをかきおくはるさ
御側近くはうらる藤原直彦舟

文政七年甲申夏四月

江戸日本橋通壹町目

須原屋茂兵衛

發行所

同下谷池之端仲町

須原屋伊八



